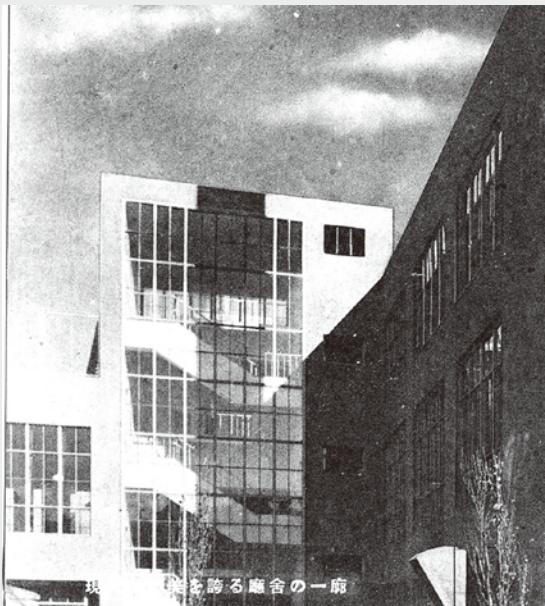


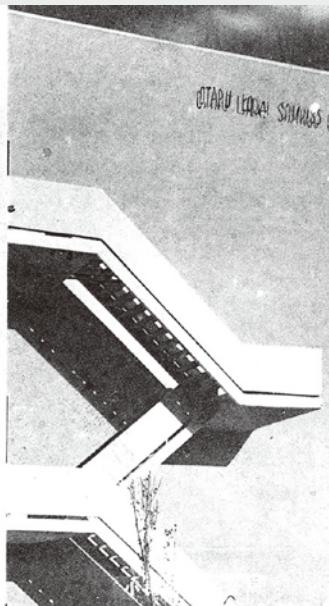
緑

アオバト

九鳥



現  
美を誇る廃舎の一席



旧小樽地方貯金局(現市立小樽文学館・美術館)

## 小坂秀雄とモダニズム建築 ～歴史的建造物との関わりのなかで～

2019.7.6 駒木定正

### 1. 小樽地方貯金局との関わり

この建物は最初から文学館美術館ではなく、もともとは小樽地方貯金局でした。小樽地方貯金局に勤め、この建物のなかで版画を作られて日本中、いや世界でも著名な一原有徳先生から、この建物の保存について話を受けました。一原さんが私にこんな手紙をくれました。1994年なので25年前の話です。僕がこの建物を調べるために携わったのも、この手紙がきっかけです。

「拝啓」はじめてお便り差し上げる次第で失礼ですが、友人にお聞きすると息子(職場の先輩にあたる)正明がお世話になっている方、そして一度家を訪ねてくださって、版画を買っていただいた方だとわかり失礼しました。そのときお話ししたようにも存じますが、今の市立美術館の建築が、こわされるかの話を耳にしまして、これはと市長にも手紙を書いてみたりし、建築関係の知人に話しかけをしているうち、小坂秀雄建築は現代建築として私が思っていた以上に立派な作品であることがわかつてまいりました。そして植田実さんが遠藤明久先生にお願いしてくださり、その遠藤先生が駒木様に運動をお願いしたら、詳しく返事ありました。改めてお願いします。今まで私のしたことコピーを全て送らせていただきますので、そのうち、拝眉を得てお願いします。(後略)」僕がこの建物を調べるようになつたことの紹介です。

もう一つ、文学館の玉川館長から2008年に「古い図面が残っているので、描き起こしてほしい」と依頼がありました。それは青焼き図面で、なくなっている箇所や文字がはっきり見えない部分がたくさんありました。まず僕の大学校の学生に卒業論文のテーマとして、文学館にある原図を描き出し、それを基にして模型を作製してもらいました。模型の窓越しに近づいてみると広々とした部屋だったことがわかります。手がけたのは大岡君と坪田君という二人で、坪田君は日本の建設会社からメキシコに、大岡君はスウェーデンハウスで仕事をし、二人とも国際的に活躍している卒業生です。北海道職業能力開発大学校のパンフレットや新聞にもこのことが掲載されました。



駒木定正

近畿大学理工学部建築学科を卒業、一級建築士の資格を取得。

北海道大学において「明治前期の官営幌内炭鉱と幌内鉄道の建築に関する歴史的研究」で工学博士の学位を取得。

小樽市文化財審議会会長、小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観審議会会長、小樽観光大学校運営委員会委員を務める。

北海道新聞社から『小樽の建築探訪』など著書多数。

現在、駒木定正建築史研究所、北海道職業能力開発大学校特別顧問。



市立小樽美術館  
otaru city museum of art

ISSN 1882-3815

## 2. 小樽地方貯金局の建築概要

建物の概要は、鉄筋コンクリート。地下1階、地上3階建て。地下には部分的に階段室もある。1952(昭和27)年の建物です。設計は小坂秀雄。特徴は階段のところがガラス張り、四角形で統一されている、これが当時の新しい形でした。

四角い形で統一しているのが特徴で特に見上げるとそれが立体的に奥行があるように伸びている。小坂秀雄は1970年代に入ってさらにこのスタイルを延長していきます。このシーンを記憶に留めておいてください。

階段室もなかなか良いです。小樽市が後で建築基準法に基づいて付け加えた手すりの線が平行に見えていますが、もとは低い方が本来の手すりでした。総ガラス張りなので、階段が宙に浮いているように見えるのが特徴です。さらに下から見上げた時、四角い形が蛇のように上がっている。

内部の雰囲気が良く分る場所は2階文学館の喫茶コーナーで、海側、山側に分ける間仕切壁はもともとなく、非常に明るい空間です。こういう部屋の趣であったことがわかります。外側の壁は元の壁を活かしている。美術館は内壁を作り、色々な作品を展示できる場として親しまれる会場となっています。

建物をよく見ると発見があります。正面玄関に小樽地方貯金局、下に「OTARU LOSAL SAVINGS OFFICE(小樽ローカル セービングスオフィス)」と、創建時に作った看板が残っていました。貴重ですね。入口玄関の文字と案内表示の書体は同じです。火災報知器の表示も書体が統一されている。文字もデザインとして統一しているというのが特徴です。トイレは改修しましたが、雰囲気はそのままである。

## 3. 小坂秀雄の経歴

小坂秀雄は1912(明治45)年東京日比谷公園内、日比谷公会堂から歩いて数分の松本楼という洋食屋に生まれました。学生運動が激しい頃一度焼失し、現在の建物は小坂秀雄の設計です。東京のど真ん中の日比谷公園のなかで生まれ、中学校までここで生活なさったと、ご子息の小坂徹さんに教えていただきました。1935(昭和10)年東京帝国大学の建築学科を卒業。2年間設計事務所に勤めていましたが、どうしても通信省の建築に入りたいと、1937(昭和12)年技手として入省します。東京大学出身ですから一般的には技手ではなく技師なのです。ところが枠がなかった。同期の人たちは技師で入っています。通信省に入りたい理由は一級の仕事をしていたからです。記録を見ると技手と技師は昼食の食堂も異なる、東大出身のエリートでも辛抱してそこで働きたいという強い意志があったんです。

没後刊行した『小坂秀雄の建築』のなかに卒業設計のホテルの図面があります。卒業設計は実際に建物が建つわけではないが、学生時代から最新の設計は四角い形がこれからの建築などと考え、生涯ずっとぶれないで四角い形を追求しています。

東大同期であった友人によれば、まずは、非常に成績優秀で、デザインが飛びぬけて上手かった。毎回講義に出てくるわけではないが、成績は何時もトップだった。小坂秀雄という名前は知っていて誰も顔は知らないかった。学校に来なくても製図が掲示されるぐらい優秀で、自分でデザインの勉強をしていたのだと回想します。

卒業後折角入った通信省の仕事だったのですが、急に中央航空研究所で設計をすることになります。本人の文章では、「僕は柱間いっぱいに窓をとりその両端には小壁をとらない図面を描いて課長のところに持っていった。ところが課長はそんなものは施工できないから、絶対にやめろと言った。僕はそんなことで自分のデザインを変えるわけにもいかず、絶対いやだと頑張った。上司は真っ赤

になって怒ったと思ったら、いきなり僕の顔をぶん殴った。僕の眼鏡は遠くへ吹っ飛んでしまった。それでも僕は自分の図面を修正しようとなかった。」

これでどんな信念を持っていた人がわかる。若いんですが決して譲らない。しかし、幸いにも殴られたお陰で小坂は通信省に戻りました。



東京通信病院看護学院(日本建築学会蔵)

そうこうして1951年、小坂は「東京通信病院高等看護学院」を設計します。コンクリートのように見えますが木造です。通信省の病院に勤める人を養成する学校です。この作品で「日本建築学会賞」を受賞

している。この賞は今でもそうですが、日本で一番古く建築家を讃える賞としては最高の賞です。その賞を戦後すぐに受賞している、決して目立って格好いいとか、奇抜なとかではなく、着実なことを目指している。貧しいなかにも地に足のついている建物を建てていきたいと考えていました。

「小樽地方貯金局」は、受賞の翌年です。賞をもらったときには、既にこの建物を設計している最中だったはずで、その時代の日本のトップの人が設計したのです。絵葉書では、小樽地方貯金局の西の壁に英文字が浮き出るようになっています。この模型を作ったときに、学生も何が足りないかわかつてながら、「これでいいじゃないですか。今もついていないですよ」と言うのを「復元するんだから付いていた方がいいんじゃない」といつて、苦労して学生が英文字を付けました。本来、手宮線側に名前が浮き出るようになっています。2階と3階は間仕切壁がなく、近代的、モダンな空間です。ここは上げ下げ窓になっていて、よくよく見ると壁に窓が開く筋が入っており、一番下の窓は、2番目に連動せず3番目と連動するようになっています。一番下を上げると3段目が下がってくる、2段目ははめ殺しです。戦後すぐこういう鉄筋コンクリートの形ができる。他にはこういう建物はなかった時代で、実験台、試みの建物だったんですね。

1952年、この建物が出来た年に小坂秀雄は大ブレイクするんです。「外務省庁舎」を設計したのは、貯金局が出来た年に設計のコンペがあつて一等に入選します。郵政の



外務省庁舎

所属でありながら、非常に秀でていて、他所の役所の仕事を垣根を越えて設計するぐらい力のある人だった。外務省の建物は、鍵の手状になっていて、ピロティという、柱があつて壁がありません。

小坂は、設計していく過程でひとつ提案をしました。庇です。庇を付けることで日光をカバーする、デザイン上のアクセントになる。庇を付けるのは、他所で結構真似しているが、実は腰に窓を作ってしまうといわゆるベランダのように、事務で仕事をしている人にとつて下から風が吹いて書類が飛んでしまう。それは合理的ではない。だから腰壁が必要で、庇なんだということでした。ベランダのように外に出られるようにと考えたのではない、と述べています。

1953年には「愛知県文化会館」の設計で1等賞になって、実際に

建設され大ブレイクした。そしてちょっと時代が飛びますけれども10年後、あの有名な「ホテルオークラ」の設計もします。金沢出身の谷口吉郎と一緒にホテルオークラの設計をする。そして翌年、ホテルオークラが出来た次の年から、「丸ノ内建築事務所」を興しました。通信省の下で働いていた5人を連れて独立しました。

1973年に日比谷の「松本楼」を設計します。この講演の前に松本楼は見なければならぬと思い、6月14日に行ってきました。食事も早々に見せていただいたところ、3階部分の照明は小坂が設計した当時のものがついていました。真ん中に大きな花が活けてあって、政治家たちがこの場所を使いながら色々な会議をやる由諸正しい場所だと教えてもらいました。

独立してからも外務省の設計を随分しています。「在外日本国大使館」、いわゆる外国に日本国の大使館を建てる時に小坂が設計している。それは本庁を設計した時に営繕室と関わり、この人なら大丈夫だと信頼してもらえて仕事がいただけたそうです。「名鉄(名古屋鉄道)」の仕事が多数あるのは、谷口吉郎と懇意になって、谷口から名鉄の社長を紹介してもらったからでした。それが今回、ご子息から教えてもらいました。

新宿駅から少し離れたところにある「KDDビル」。貯金局の階段室を見上げた時の形を、全部伸ばしたらこの建物の形に至ります。ですから高層ビルではあるが、考え方はこの貯金局のガラス張りと同じデザインを延長している。時代の先駆けをやったとみて良いと思います。KDDの大手町ビルのデザインは窓の途中から縞模様を入れるという変化を付けています。なんとこれは1992(平成4)年の作品で、その後8年後に亡くなられているので遺作の一つといえます。80歳を過ぎても、このような設計ができるんですよ。



KDDビル

#### 4. 郵政関連建築と小樽地方貯金局

次の話題に行きます。小坂秀雄はあくまでも郵政(通信)職員なので、郵政の建築家が、どんな活躍をして彼に影響を与えたのかを調べました。小樽の重要文化財の日本郵船を設計した佐立七次郎が郵政の技師でした。工部大学校第1期生の超エリートで、郵政にとっては一番最初の技師なんです。次に、吉井茂則、東京帝国大学出身で大正2年まで務めていますが、この後に郵政の建築がガラッと変わったんです。

それで、岩元禄は、大正7年から10年までしかいないんですが、今でもびっくりするくらい斬新なデザインの建物を京都に残しています。非常に短い間の在籍なんですが、今でも魅力的な建物を設計した人。その後大正9年に山田守は、東海大学の校舎を良くデザインした人で、代表作に京都駅前の京都タワーがあります。並んで大正8年に入り、ほぼ同時期にお辞めになった吉田鉄郎。山田と吉田の二人が新しい時代の郵政建築を確立します。それをひきついだのが小坂秀雄です。

ちょうどその頃、小坂は技手として郵政に入り、この二人の建築を勉強したかったのです。やがて建築関係のトップに上がり、ホテルオークラを完成させて独立します。以上この6人の流れで、郵政建築が語られるわけです。

まず佐立七次郎は「名古屋郵便電信局」(1888)を設計します。これは三角屋根と丸屋根を交互に繰り返しているペディメントのデ

ザインでいわゆるヨーロッパ風の形。日本郵船でもわかるとおりクラシックな設計で、この方が初代です。

吉井茂則。「小樽電話交換局」の新築工事は、この



小樽郵便局(小樽市総合博物館蔵)

方がトップで設計をしていました。非常に類似しているのが、国の重要文化財になって明治村に移された札幌の電話局です。残っていたら勿論重要文化財に値する建物です。小樽の歴史を見ていると必ず出て来る「小樽郵便局」(1917)、これも吉井が設計に携わっている。

岩本禄、ここからデザインが変わったんですよ。女性の身体を建物に彫刻しています。「京都西陣分局」(1921)は京都に行ったらぜひ見ていただきたい、なおかつライオンが付いています。ヨーロッパでもいろいろありますが、これほど斬新なのは紹介されておらず、しかも残っていることが凄い。1922年に亡くなっているのでこの建築は遺作です。郵政の人は度量があり先見性が高い。

建物全体に曲線を用いて「東京中央電信局」(1925)を設計した山田守は、専門的に分類すると、自分の心の表現によって建築を作っているので印象派。吉田哲郎は東京駅を降りるとすぐ今でも一部が保存されている「東京中央郵便局」(1931)KITTEがあります。吉田は、設計時に一時ヨーロッパに出張して新しいデザイン、合理主義の考え方の設計を覚えて帰って、設計変更でストップをかける。当初はもっとクラシックな建物で日本郵船や日本銀行のようにデコレーションが付いていたものでした。それを止めさせたのです。しかし満足できなかったために、大阪駅の脇にある「大阪中央郵便局」(1939)で納得ゆくものを設計します。よく見るとこのデザインは、小樽地方貯金局に似ていますね。

小坂は吉田の影響を強く受けているということが、設計の中味を見ていくとよくわかります。通信のデザインというのは山田守と吉田鉄郎の設計、二つが並存しながらデザインが進んでいました。

「吉田さんが外遊からヨーロッパの合理主義建築、国際建築を身に着けて帰られた、ただちに東京駅前に見るよう変更された。そのため最上階と1階の扱い方が他の階と違っているのは当初のクラシックな立面計画の名残であった、どうしても取り切れなかつた。完全に近代建築の様式を徹底されたのは大阪の中央郵便局であ

ろう。吉田さんが自身で満足されたのは矢張りその作品であったろうと思われる。」と小坂は書いています。



大阪中央郵便局(日本建築学会蔵)

#### 5. モダニズム建築と評価

「近代主義(モダニズム)」は主に合理主義を基本にし、物事を考え理論立てて組み立てて作るということです。線や面のような抽象的、幾何学的要素による構成を重視する、要するに四角い形とか、壁を平にするとかいうことですね。新しい美学に基づく芸術を意味している。

モダニズムというのは合理主義。「吉田さんの作品は、特に強く打たれるものは、その平面計画の合理性である。」平面計画とは間取りのことです。非常に合理的だと。「それを自ら得心できるまで練

りに練られて、その平面計画には少しの隙も見出すことはできない。」このように、小坂は吉田から学び漸く影響を受けた。そう考えると納得できるわけです。

1952(昭和27)年西陣郵便局と小樽地方貯金局は初めて鉄筋コンクリート造の庁舎になりました。それまでは木造ですから、この小樽地方貯金局は小坂にとって初めての鉄筋コンクリートの建物です。だんだんと大事さが分ってきましたね。

吉田鉄郎はワインに行き、「ゼセッション」といって今までの古い形をすべて否定した建築を見て帰国します。日本郵船のようなああいう形はもういらない。新しい形をこれから求めていこう。それは建築だけでなく、クリムトのような美術の人々もその中に入ります。メンバーの一人、オルブリッヒの建物「ゼセッション館(分離派会館)」は、壁は四角い形、今迄の柱の上にあった彫刻模様、花びらや渦巻き、古代ギリシャの建築からきた形はもはやここでは使っていない。中に入るとガラス張りの天井で、広い部屋が出来ている。上からの光をガラス張りにし床に落とす。新しい時代、鉄とガラスの時代になっていた。日本といえば明治時代にもうこれが出来ている。

オットー・ワーグナーは模様を付けるけれども、壁は平たくして模様をついている。今迄の石造りの重たい建築から変化している。美術の本に良く掲載されている「マジョリカハウス」。壁の中心から花が描かれている。実際見るとわりと冷めた色でした。印刷は発色良くしていると思います。四角い壁に花びらの模様をつけていくというデザイン。「ワイン郵便貯金局」もオットー・ワーグナーの設計です。外壁はピンで石を留めて、本当の石造のように見せず、重たい建物から解放させようと、中のホールの天井がガラス張りで、床はガラスブロックです。

時代は変わりました。バウハウスはガラス張りですね。芸術家を育てて行こう、なかでも物を作る建築家、そういう人たちを若いうちから養成しようとしてできたのがバウハウスです。そのデザインが日本に入り、典型がこの小樽地方貯金局なのです。この建物を残しましょうと僕はあまり言いたくない。言えば、また駒木かということになる。でも、あえて言うならば、近代建築を保存するのは世界の動きなんです。世界の動向から孤立してはいけないんですよ。DOCOMOMO(Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement)、簡単に言うと近代建築、モダニズムの建築と環境をちゃんと残しましょうと訴えている国際学術組織。それはオランダの大学の先生が考案して、建築家、都市計画家、行政関係者も参加していて、もう世界中の潮流なんです。DOCOMOMOに認定された建物は、京都西陣郵便局、東京駅、それから吉田が完璧にできたと自負した大阪中央郵便局。もはやそれらはDOCOMOMOに入っています。旭川市役所は格好いいですね。これも世界的に認められた建築です。



バウハウス校舎(『新建築 建築20世紀』)

これから小樽の未来100年の体系を行政各界、そして市民団体が共に考えて建造物を活かすまちづくり、この建物も含めてのまちづくりをしていこうと、宣言をした。

## 6. 市立小樽美術館・文学館の今後

冷静に考えれば、この小樽地方貯金局は、自信をもってDOCOMOMOに推薦できるレベルの建築です。それは駒木だけの、日本だけのものではなく、世界のレベルです。

加えてこの地区はすごい地域だと言いたい。日本銀行、三井物産、それから北海道銀行、ハローワーク、三菱銀行があって、北海道拓殖銀行がある。明治から大正、昭和に至るこういう建物のある街というのは、日本中探しても他ないんですよ。小樽だけです。5月25日、神戸から西村先生(神戸芸術工科大学)を招き、セミナーを小樽で開催しました。京都の中京郵便局を改修するときに非常に苦労した。その次にやったのは小樽郵便局と紹介しています。なぜかというと、街角にあう風景に建物を設計したと仰っている。西村幸夫先生はこの建物も大事だと指摘されています。色内の近代建築を並べてみると、古い順番ですが、三菱銀行、拓殖銀行、第一銀行、三井物産、そして小樽地方貯金局。それらはずっと日本のトップの人たちが設計し、それがそっくり残っているのは、とてもなく重要なことで、全部がDOCOMOMOになれる、そんなところに私たちが住んでいる。

小樽地方貯金局の美術館、これを核にして手宮線があり、運河があり、転々とある建物群は、日本でここしかないというような建物群が集中している。だがしかし、この美術館の現状はどうか。これはもう世界的に見ても重要な建物でDOCOMOMOになっておかしくないと、筋立てて説明ができるのですが。

先日、地下通路を見てきました。地下には明り取りの窓があり、今芝生になっているところまで少し飛び出している。本来の建物の地下部分が芝生の方に延びていて、その部分は光が入らないから、上から光を落とそうと考え、明り取りの窓を付けた。それが地下の雨漏りの一つの原因になっていると思います。現状のまま放っておいたら駄目ですよね。また外の非常階段は綺麗なんですが、薦が這って、種が飛んできたのか草が生えている。雨漏りが上手く処理できていません。非常階段もオリジナルですので直さなければなりません。

小樽市はお金がない。小樽のこの建物が大事だという前提に立ちながら。ではどうしようか。黙っていたら壊れていく。先日のセミナーでは120人の席に、170人が詰めかけるなかで『まちづくり宣言』をしました。「主要な歴史的建造物は近代の建築であるがゆえに、耐用年数がこの建物は70年(ちなみに北海道拓殖銀行は80年)、修理方法が新たな課題であり、まして現在の維持態勢のままでは大規模な地震や災害が起きると存続できる保障はありません。100年経過したものもあり、一般的な耐用年数に達しているけれども、国の文化財の建築でもコンクリートの建物を直すというのは、その修理方法は実は確立していません。はどうしたらよいのか。国の制度に基づいて、最新の修理技術を随時入れて行って、維持保全と活用を行うことによって、小樽の近代の歴史的建造物とその街並みが全国で一番、50年経っても100年経ってもずっと一番にして行きたい。歴史を活かすまちづくりの法律と制度を導入して、全国随一の近代建築のまちとなり、ひいては市民が小樽のまちにいっそう誇りを持つことになる。」

それは誰のためかというと、子どもや孫たちのためにその価値を伝えていく、と5月25日に宣言したわけです。小樽市と共に開催したことなので、小樽市も基本的に同じ考え方ということです。小樽の近代建築は世界の建築と比べてもDOCOMOMOに値するので、この旧小樽地方貯金局は今後国の伝統的建造物群保存地区の制度と歴史まちづくり法の導入を検討して保全と活用を図ることを提案します。世界的なレベルで大事なのです。